

## シベリア抑留

### 「ナホトカ五九〇病院」

神奈川県 丸山 國武

この病院は私が捕虜として旧ソ連に抑留中最後の收容所であり、最も思い出の多いところでもある。目を閉じれば悪夢のように頭に浮かんでくる。入営、渡満、日ソ開戦、敗戦逃走、武装解除、捕虜、シベリア抑留と、苦難と血のにじむような暗い三年七カ月間の道であった。東京ダモイ（帰国）東京ダモイと何回耳にしたことであろう。ウソと知りながら何百回とだまされたことでした。「ノルマ」を完遂すればすぐ帰してくれると、シベリア中部地区タイセット各收容所において、シベリア第二鉄道建設作業のために捕虜という名のもとに強制労働に虐げられながら、悲しくもタイセット地区からブラーツク地区まで距離として約三〇三キロメートルの鉄道及びその施設を完成してし

まったのである。そして、いよいよ私達も帰還要員として、ダモイの道についたのである。

やせ細った弱兵として、シベリア鉄道を途中、マルタ、イマン、ウオロシロフと、旧ソ連兵の監視で強制労働をやりながら、食糧の割当ても黒パン三〇〇グラムという配給のため、私達は口もきけないほど疲れきっていた。しかし夢にまで見た海、ついに来た海、日本海、海、海、今度こそうそではなかった海なのだ。後で聞いてわかったことだが、そこがナホトカであった。目の前の海を見て涙が自然にこぼれて仕方がなかった。タイセットを出てから約八カ月ぶりのことである。

ナホトカは、日本人捕虜を集団帰国させるための業務を取り扱っている收容所で、通称第一分所と名付けられた收容所から第四分所までの四つの收容所があり、この收容所はちょうど我が国の昔の関所と同じような所で、民主化（いわゆる共産化）されていないと、この收容所の中には入れず、反動として、労働大隊や作業大隊に逆送されるところでもある。もちろん

この勤務員は、旧軍隊や民間人で構成された日本人であったが、戦勝国旧ソ連の虎の威を借る狐で、絶対的の権限があり、威張っていた。私たちはシベリアの奥

地にいたため、旧軍隊そのままに編成され、民主化されていなかったもので、とても第一分所（収容所）には入れなかった。ところが幸いにして昭和二十二年度最終の日本からの引揚船が入港し、同年度の日本人捕虜送還業務は終了とのことで、約三百人の乗船の余分があり、旧ソ連側から大至急、ただいま「ナホトカ」港に到着した我々の大隊が指定され、直ちに入所せよとの命令があり、十一月二十八日第一分所に入所が決まった。続いて第二分所、同三十日には第三分所に入所し、うるさい身体搜検や物品審査もあったものではない、もう忙しいばかりであった。もう船はすぐ目の前の岸壁に着いている。第四分所というところは、いわゆる税関と同じ役目をするところで、同分所に入れば他の地区には回されることもなく、帰国は絶対に保障されると聞いている。

いよいよ明十二月一日は引揚船に乗り、懐かしい日

本にダモイができたわけである。このまま私も船に乗り、復員していたならば、この五九〇病院のことは書けなかったであろう。

残念ながら、不幸にして私は、ナホトカに来る直前のウオロシロフという収容所で夜間作業中に両足先から両足付け根付近及び両手指等が凍傷にかかってしまい、治療もできないままに作業を続けていた。内地の寒さとは全く異なる零下二十度以下の寒さの中を、旧軍隊の夏衣袴と古い地下足袋だったので、私達ほか數十人の者が凍傷にかかってしまった。私達は同じ部隊の者ではなく、各収容所から次々と集結し、いわゆる混成した部隊であって、顔や名前も知らない者ばかりであったが、寒さに慣れた在満経験者が多かったので比較的軽傷で、一番の重傷は東京育ちの私一人であった。内地の凍傷といえばしもやけぐらいで、手足が腐るということはないが、シベリアや旧満州の凍傷はいったんかかると耳がとれるとか、手足を切断しないと助からないということがたびたびあって、中には死亡した者もいたと聞いている。

私はそれでも帰りたいために凍傷は恐れなかった。両足先が特にひどいので足が不自由になりながらも、旧ソ連の監視兵に発見されないように、戦友と戦友との間に肩を借りながら、十一文半の大型編み上げ靴をはき、なんとか問題の各分所をごまかして通過することができた。もうこっちのものだ。内地にいる父母の顔、姉や妹や弟のこと、東京は一体どんなふうになっているのだろうか。そんなことをあれやこれやと考えながら、第三分所の冷たい幕舎のベッドに横になって、明日を楽しみに、眠りかけていた。

ところが、各幕舎内が騒がしくなってきた。旧ソ連の憲兵が各幕舎を調べ出している。いわく「凍傷患者がまぎれ込んでいる」「患者を帰国させたら米国により口実を与えることになる」「早く患者を探せ」「凍傷患者が未発見のときは全員帰国を取り止めだ」と、次々に幕舎内の日本人は外に出され搜索され出した。旧ソ連兵が通訳を同道し「拳銃」を構えながら、だんだん私のいる幕舎に迫ってくる。もうだめだと覚悟し、私は思い切って大きな声を出した。「凍傷患者は

ここにいます」と、手を挙げて名乗り出た。もし私が名乗り出なかったならば、せっかく乗船と決まった戦友全員の帰国が取り止めだ、それこそみんなのためにも申し訳ない。今から考えてみると二十二歳の若輩の私が勇気をもってよく決心がついたものだ、五十有余年前を振り返って思う。

早速、通訳の喜びの声や、戦友たちの「なに、すぐ後便で帰れるよ」「心配するな、まだ若いじゃないか」「どうもありがとう、これで帰れる」等々の声を耳にしなが、泣くに泣けず、私一人が担架に乗せられ、せっかく入所した第三分所をあとに第二分所それから第一分所と逆送されてしまった。ああ！ 第一分所の医務室で直ちに通訳立会いのおえ旧ソ連の軍医に診察され、即刻五九〇病院に入院を命ぜられてしまった。

※今日も元気で笑っていこう

いつも心は日本晴れ

助けられたり助けたり

民主同志のとなりぐみ（※以下くり返し）

この歌は、ナホトカの港と五九〇病院の中期にあ

り、民主化されていなかったり反動という名のもとに残留された名称五三収容所（ナホトカ労働大隊）の戦友たちが作業に出発するときに歌う一節で、当時は誰でも知っている歌で、この歌を口ずさむことにより、一刻も早く内地から引揚船が来て日本に帰りたいたいと心の中で思っていたことであらう。

五九〇病院はナホトカの港から約十キロメートル離れた丘陵地帯のふもとにある。なぜ五九〇病院といえるのか今でもわからないが、もともとソ連の陸軍病院を改造して作られたもので、建物も古く、医療設備も悪く、病院といっても収容所の一種で、病院に勤務する日本人の宿舎としての幕舎と、病院の建物とに分けられている。

五九〇病院に入院と決定された私は、同夜直ちに旧ソ連の軍用トラックの後部荷台に乗せられ、全く未知のこの病院に到着したのである。心の中では今まで何回もうそをつかれていたので、病院ではなく、どこかの収容所、または殺されるのではないかと、不安でいっぱいであった。後で知ったが「国際条約」では捕

虜は簡単には殺されないと言われているが、戦勝国である旧ソ連は何をするか、わかったものではない。兵隊となった以上はいつ死んでもいい覚悟はできているものの、「死んではならない、どんなことがあっても生きて祖国の土を踏まなくては死んでも死にきれない、なんとか生きよう」と、そればかり考えていた。死ぬことよりも生きることの方が難しいのであった。到着した同病院をみて、うそではなかったと、やっと落ち着いたのである。時、昭和二十二年十二月一日である。運命の皮肉とは恐ろしいものではないか、他の戦友達は同じ日に復員船に乗り懐かしい日本に帰っていったのであった。

この病院には当時何十人かの病人と若干の日本人と韓国人の勤務員がいたが、人が足りないせいか、病院や旧ソ連側からよく使役（作業）が命ぜられた。もちろん独歩患者をはじめ軽傷や重傷の区別を問わなかった。足が痛いのに作業に出されたらたまらない。このままでは、両足が腐って切断の可能性もあったので、私は軍医が診察にくるたびに「イタイ、イタイ」を連

発して、大声を上げて、使役や作業には絶対に出なかつた。これがよかつたのかどうかわからないが、意外に早く暮れの二十五日には退院することができた。もちろん治療などはなかつたので、まだ当時の凍傷の傷あとが右足表面にシベリアの嫌な思い出として残っているのである。

入院中考えていたのだが、どうせ運命のいたずらで一人残されてしまったのであるから、無事元気に退院したならば、この病院でどんな仕事でもよいから働こうと決心し、退院と同時に勤務員になることを志願し申し出た。これには病院側や旧ソ連軍の責任者も驚いたらしい。何故ならば今までの退院者で働こうとする者は一人もなく、全員「ナホトカに帰りたい」と申し出て、誰一人としていつ帰れるかわからないこの病院に残る者はいなかつたのである。私は、どんな嫌な仕事もやった。人の嫌がる作業には、いつも手を挙げて積極的に先頭に立った。患者の世話をする衛生勤務はもちろん、炊事係、便所清掃係、滅菌係、水くみ運搬係、解剖室立会い係等、しかし一番長くやった仕事は

死体運搬埋葬係であった。

今から考えれば都会育ちの私がよくできたものである。この仕事は午前中、同病院の裏山の墓地にのぼり穴を掘り、午後、死んだ戦友を埋葬する仕事である。この病院に初めて勤務する者は、誰でも一回以上は死体運搬を強制的にさせられた。一つのしきたりとなっていたのである。死体運搬だけは、どうしたわけかやりてがないので勤務員が互いに交代でやるのとことであつた。私は心の中で「これではいけない、誰かがやらなくてはならない。よし自分がやろう」と決心した。同病院では、開設以来約五百人の日本人捕虜が死亡したと記憶しているが、大部分が栄養失調、赤痢、下痢、肺結核等であつた。なかには労働大隊で作業中転落した死体も幾つかあり、死体が重く運搬に苦労したことが度々あり、途中何度かいやになり、やめようかと何回も考えたことがあつたが、歯をくいしばつて頑張つたものである。墓地は病院から約二キロメートルの丘の中腹で、ナホトカの港がよく見える所にあつた。丘にのぼると海がよく見えて、日本海を渡れば内

地だなあとはい出すのである。酒もなければ、金もない、女もいない。食べるものも少ない。早く日本に帰って「食べたい」「ほたもちを食べたい」「白いご飯を食べたい」もう食べることにしか考えが浮かばなかった。衛生兵の資格等はなかったが、患者の看護として病室で患者に付き添っているときに、死んでいった戦友が「日本に帰りたい」「内地に帰りたい」「こんなところで死にたくない」と口癖のように言いながら無念やるかたなく死んでいったかと思うと、生き永らえた私が、この戦友を埋めてやれば死んだ戦友の供養にもなるとまた頑張った。

まず、いかれたエンピ(ジャベル)を手を持って墓地にのぼり、適当な箇所を発見し、縦約二メートルくらい、横約一メートル、深さ約二メートルくらいの穴を掘るのである。この「ノルマ」はなかなか大変な仕事であった。土は硬いうえエンピが悪いので相当に苦労した。しかし私は泣かなかった。なにくそと力を入れて掘った。掘ったあとは必ず私が入り一人横に寝てみて、死んだ同僚が安らかに眠れるよう

に、自分自身でためしてみた。私がやる前は、冬のことでもあり、穴が深く長く掘れないので、面倒くさいのか二人や三人を入れたりして、足や首がひん曲がって苦しうであったとのことである。

そんなことがあったら、死んだ本人はもとより、家族に対しても申し訳ないと、またエンピに力が入ると隣の土地からにゅっと真新しい骨が出てくること、がたびたびあった。午後は不思議と三日に一人くらいは死者が出る。平均して夏より冬が多かった。病院で死亡者の軍医によって簡単に解剖所見が行われ、死者は終了すると、午前中に墓地で穴を掘り終わって幕舎で待機している私のところに連絡がくる。私はこのような仕事をする事によって、いつしかこの病院にはなくてはならない人物になってしまった。

ソ連という国は日本と異なり死者を丸裸のまま埋葬する。捕虜という身分のためなのか、死体が解剖のままの丸裸で死者に対しても失礼なので、病院の所長と何回も通訳を通して交渉し、相手側も納得し、やっと

旧軍隊の軍衣袴の配給を受け、着せてやることができ

た。解剖室に置いてある亡き戦友の死体に手を合わせ  
て一礼して、毎日交代で来る他の一人の勤務員と私の  
二人で担架をかつぎ、墓地に行くのであった。墓地に  
行く途中、旧ソ連の民間人に時々会うことがあった  
が、私達が泣きながら担架を担いで行くのを不思議そ  
うに眺めて、なぜ泣くのかと質問されることがある  
が、いくら説明しても納得しなかった。部隊が異なる  
が、同じ釜の飯（病院）を食べた戦友が、日本へ帰れ  
ないで悔し涙で死んでいったかと思うと、私らはどう  
しても死んだ本人や家族のことを思うと泣けて泣け  
て、たとえ親や兄弟や身内でもないけれど自然に涙が  
出てくるのであると再度説明するのであるが、旧ソ連  
という国民性なのか、宗教の違いなのか、今でもわか  
らない。私もロシア語がよくわからないので、手真  
似、口真似で、想像するところによれば、死ねば働か  
なくていいではないかと、なにも君達が泣くことはな  
いではないかというのである。もちろん礼をするわけ  
でもなく、ただ何事もなかったように知らん顔をして

通りすぎるだけであった。

墓地に着き、何回も何回も敬礼し、このまま放り込  
んでは痛いだろうと、静かに足の方からずりおろし、  
穴の中に入って両足を引っ張って寝かせてやるのであ  
る。その時の戦友の顔はなんと書き表したらよいので  
あろうか。軍人として旧満州の各地の戦野で戦死者等  
の顔を見ても戦争中という特異な心理状態なので気に  
もしなかったが、この場合は私もかわいそうで顔を  
見ることは忍びないので、そばに咲き乱れる名もない  
草や花をむしり取り顔にかけてやり、土を入れてやり  
ながら、「ああ、たとえ肉体は滅びても、魂だけは日  
本に飛んで帰って暖かい肉親の元に、そばに行って下  
さい」と祈るのである。エンピできれいに土をなら  
し、他の相勤員が「マホルカ煙草」を線香代わりに立  
ててやると、煙は風に流れてどこに行くともなく空に  
消えていった。遠く日本海が見える墓地の上で、あら  
かじめ用意され担架の上に乗せて持ってきた墓標を立  
てて、後ろ髪を引かれる思いで懐かしい軍歌を歌いな  
がら墓地をおるのである。この墓標は大工の経験の

ある勤務員の一人が木の板、小さな立て札のようなものを作り、氏名は記入されておらず、ただ何列の何番の記号しかない簡単なものである。

「異国の丘」の文句ではないが、「ああ、こんなところで倒れてたまるか」と、相勤員が大声で叫ぶ。私はいもう二度この仕事はしたくないと思った。記憶はうすれてしまったが、このようにして取り扱った戦友の死体は、復員するまでには数十人を越したであろう。(合掌) しかし、ついに私の任務も解任のときが来た。

春が過ぎ、夏が過ぎ、また寒い冬がやってこようとしている。旧ソ連兵に信用されて、所長から特別外出許可も認められ、旧ソ連の古びた軍用トラックの後部に乗車してナホトカの港まで食糧受領や物品搬入のために何回も往復させられた。旧ソ連兵の監視もゆるやかにになり、会話も多くなり、「ヤポンスキー(日本人)は若いのだからソ連のマダム(女)をもらってソ連に残った方がいい」と何回も言われるようになった。ナホトカの港に行ってみると港の岸壁等には多数の日

本人捕虜が作業中であった。

日本人同士の会話は、うるさい監視人(もちろん日本人)がいて話ではできなかったが、旧ソ連政府は、日本人抑留者を早く日本に帰してやりたいが、アメリカ政府がなかなか引揚船をよこしてくれないから、ナホトカ港はシベリア奥地からどどん日本人が流れて来て数万人となってしまう、港の収容所はあふれてしまおうので再度外の地区に回して作業してもらっている、日本人はみんな喜んで作業をしている、船をよこさないアメリカや日本政府が悪いのだと宣伝し、旧ソ連側はさかんにアメリカ側を悪者にしていた。ナホトカにいる日本人抑留者は本当のことはわからないので、ナホトカ地区で日本人があふれており、船をよこさない日本政府や米国が悪いものと全員信じているようであった。日本人はよく働いたのである。ナホトカの港の立派な建物の建築は日本人が全部やったと聞かされて驚いている。私が復員船に乗って帰国する際も、岸壁やその付近で働いている人々が異口同音に、「先に帰ったら、早く船をよこしてくれ」「船を回してく

れ」と手をいつまでも振っている姿が今でも目に浮かび、あの人達もその後無事に復員できたのかと思う。

私も病院の勤務員の中では一番古くなり、勤務員の責任者からもかわいがられ、まじめに働く存在も認められ、黒パン等の食糧もなんとか自由になり、やせ細った身体もやや丈夫になってきたが、あのシベリアの山中のタイセット地区では、強制労働と寒さと栄養失調のため衰弱してしまい、冬が来れば寒さのために身体がもたないことを自分が一番よく知っていた。病院の勤務者も三カ月ごとに交代してナホトカに帰って行った。何回も何回も復員業務の補助もし、お手伝いもさせてもらった。当然先にダモイができる権利や順番を持っていたが、後から来た戦友たちや、病院から退院した者や、中には勤務員からも「おれには妻子がいるから」「年をとっているから」等々と涙を流しての哀願には勝てなかった。私のように何カ月もこの病院や勤務員として幕舎にいるのは辛いのであろう。引揚船が入港するたびに先に帰してやった。

本当にそれらの人々は私に対して仏さまを拝むよう

に手を合わせて先に帰って行った。

九月に病院船高砂丸が入港したときに、私は病院側及び勤務員の責任者の許可を得て、病院船の衛生兵として、また患者の付き添いをしながら、思い出多い同病院を去ることになったのである。

旧ソ連兵とも顔なじみになり、この病院にいつまでもいつまでも残ろうと思った私であるが、やっぱり日本人であり、祖国日本に帰らなければならないと思っただからである。もちろん勤務中に過労のため倒れて再度この病院に入院しお世話になり、自分の身体に自信が持てなかったことと、もう一つは、平和なこの病院にも民主グループの一団が乗り込んできて共産主義の学習が始まったことにもよる。ナホトカ港を後に船足を速めた高砂丸は昭和二十三年九月十一日、舞鶴港に無事到着し、同十二日なつかしい日本に上陸復員できたのである。生きていて本当によかった。

横浜港や新潟の港からナホトカ向けの定期航路があると聞くが、あれから五十有余年、現地は一体どうなっているだろうか、一度でよいからナホトカの墓地

のお参りをして、亡き戦友の冥福を祈りたいと思つて  
いる。  
台掌

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年十月八日

経歴

昭和十五年三月二十五日 東京府東京市平塚尋常高等

小学校を卒業し、自営業

(運送店) 家事手伝い

十七年九月八日 横須賀海軍工廠造船部に徴用

二十年二月二十五日 現役兵として輜重兵第五七

連隊補充隊に入営、陸軍二

等兵

三月七日 博多港出帆、朝鮮釜山港上陸

十日 満州国東安省西東安着、第一二

六師団砲兵大隊に転属(満州第

七九五部隊)

二十五日 移駐のため西東安出発

二十八日 東安省鶏寧県滴道着、警備

に就く

六月三日 疾病により林口陸軍病院滴道分

院入院(満州第二一〇八二部隊

林隊松隊)

十日 第一二六師団野砲兵連隊と改編

編成完結

八月一日 陸軍一等兵

九日 ソ連対日宣戦布告 ソ連軍東満

国境各地より越境す

十日 治癒退院原隊復帰、滴道残置隊

本部指揮班行李編入、滴道残置

隊は大碾子山陣地(八面通)よ

り弾薬受領のため帰隊せる三島

正道中尉の指揮により同陣地に

向け滴道出発

十二日 麻山の戦鬪に参加

十六日 七星の戦鬪に参加

九月十七日 鏡泊湖西北部(通称サランチ

ン) 付近武装解除、東京城収容所へ

二十二日 蘭嵐飛行場跡収容所(八遠

溝作業隊第十六大隊第四中

隊)

十一月二十日頃 満洲里通過入ソ

十二月一日 タイシエツト(タイセツト)地

区第五収容所

二日 同第七収容所

二十一年四月二十三日頃 同地区第二十二収容所五

十六K?

五月頃 疾病(栄養失調)のため入退室繰り返す

六月頃 同地区第一六四K収容所

九月頃 同地区第一八五K収容所

二十二年一月頃 凍傷のため練兵休

二月頃 弱兵(OK)と認定

三月頃 帰還(エツタム)要員指定

四月頃 同地区第九八K収容所、同地区第

二二K収容所

五月頃 マルタ地区(中間集結地)収容所

六月十日頃 イマン地区第三八収容所(ナ

ホトカ港引揚船なし 二カ月

道路工事)

十月二十五日頃 ウオロシロフ収容所(夜

間作業中両足先等凍痛)

十一月二十五日 ダモイ要員として同所出発

二十八日 ナホトカ着

三十日 疾病(凍傷)申告し同地区か

ら第一分所へ逆送

十二月一日 ナホトカ五九〇病院入院

二十五日 退院し、同病院勤務員志願

二十三年三月二十日頃 同病院再入院(病名不詳)

九月十日 高砂丸にてナホトカ出港

十一日 舞鶴港着

十二日 同港上陸

二十四年二月一日 警視庁に採用さる

五十九年三月三十一日 警視庁を辞職し、その後幾

つかの戦を経て現在に至る

以上

## シベリア抑留者から

### 平和のため日・ロ両国民に訴える

新潟県 高橋 吉郎

昭和二十年八月九日の未明、ソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄して我が国日本に宣戦布告して来たのであるが、旧満州の黒河、虎林、ハライルの国境三方面から飛行機、戦車による空・陸二段がまえて怒涛の如く急襲して来たのである。僅かな兵力しかなかった関東軍は、兵器も弾薬も乏しく急襲して来たソ連軍に立ち向かおうとしても力の比ではなかった。しかし決死隊をもって激しく抗戦したのである。各所に激戦が展開され、特に国境付近においては双方とも多数の戦死者を出したのである。優勢なソ連軍は忽ち国境を突破し、新京・奉天などの主要都市に迫り、ソ連軍の威

力は日本の残留関東軍に対しては赤子の手をねじるが如くであり、優勢な攻撃で襲いかかり全満州を忽ち占領してしまったのである。空き巣狙い同然の戦闘であり、在留日本人の惨状は悲惨を極めたのである。在留邦人は避難するいとまもなく、不意のソ連軍の侵入により一般家庭にまでソ連軍が自動小銃を携えて入り込み、殺戮、強奪、強姦など凶悪の限りをつくしたのである。

私は昭和十八年十月五日、会津若松東部二十四部隊に召集により入隊した。それまでは新潟県巡查を拝命し、教習所を卒業して新任一年二カ月の外勤勤務中から入隊したものであった。シベリアに抑留中、特高ではないかとソ連軍の将校から取調べを受けたが、そうではないと答えた後それ以後は追及されなかった。しかしシベリア抑留中は殆ど作業隊の責任者をやらされてソ連軍に信頼されたのか、ビスカノボーイ（ソ連の歩哨がつかない）で収容所を出発する際サインをして作業に出て行き、誠実にソ連軍の指示に従い、いつも